

日銀支店長が語る

# 経済よもやま話

## 第2回 無くて七癖



日本銀行前仙台支店長 竹内 淳

### 統計は役に立つ

最近、「統計学」がブームだ。IT技術の進歩で、データ収集・分析が容易となり、それがビジネスを産み出すようになったことで、人気に繋がっているのだろう。因みに、筆者の大学時代も「統計学」の授業は人気だったが、こちらは楽勝科目だったからに過ぎない。

さて、統計は、データを集めて作られるもので、身近な存在だ。例えば、テストの平均点や偏差値という統計を知れば、自分の位置がわかる。過去と比べれば、成績の推移もわかる。統計が「現在を写す鏡」と呼ばれるゆえんだ。野球監督は、打率という統計をみて、次の打者（投手）を交代させるか考えるだろう。統計は、先行きを照らす「羅針盤」にもなるのだ。

### 公的統計を活用しよう

行政機関が作成するのが公的統計だ。なかでも国勢調査、国民経済計算、鉱工業指数など重要なものは、法律が基幹統計と定めている。基幹統計は、①政策の企画立案・実施に役立つ、②民間での意思決定や研究活動に広く利用される、③国際比較を行うことができる、ことが求められる。

せっかく費用をかけて、公的統計が作成されているのだから、国民としては大いに利用したい。しかも無料で、政府の統計ポータルサイトの使い勝手も決して悪くない。

### 「利用上の注意」を忘れずに

ただし、どんな統計にも歪みや癖は存在する。

無くて七癖なのだ。そのため、以下に述べるような「利用上の注意」を忘れてはならない。

一つは、サンプルの問題だ。多くの統計は、費用や迅速性に鑑み、サンプルにより作成される。しかし、サンプルが全体を適切に代表しているのかという問題がある。調査方法などにより、属性に偏りが出てしまうことがあるのだ。サンプル替えも、統計に断層を発生させることがある。

他の統計を加工して作る加工統計は、作成方法に注意したい。例えば、「出生率」低下のニュースを聞いて、「最近の若い夫婦は、子供を持ちながらいないのか」と誤解していないか。出生率は、正確には「合計特殊出生率」という名称の統計で、出産可能年齢（15～49歳）の女性の年齢別出生率（年齢別の年間出生数÷同女性人口）の足し上げで作成される。女性がそれぞれ、生涯に何人子供を産んだかを調べていると状況把握が遅れるため、編み出された工夫だ。その計算で、分母の女性人口には未婚者が含まれる。実は、未婚率の上昇こそが、近年の出生率低下をもたらしている。それに気付くと、少子化対策としては「子育て支援」のみならず、「結婚し易い環境作り」が重要だとわかる筈だ。

統計の歪みや癖を完全に無くすことは、難しい。とするとそれらをきちんと理解したうえで、賢く活用するというのが大切だ。

（日銀仙台支店長の交代により、次回からは後任の岡山和裕氏が本エッセイを担当します）